



卓 話



「新宿の歴史と花園神社」

花園神社宮司 片山 文彦氏

新宿を一言で表すと「ターミナルと女郎の街」です。どの土地にも郷土史家がありますが、新宿にはおりません。私は70歳に成りますが、生まれてからずっと新宿におりましたので、新宿の流れを目にして参りました。



新宿の歴史は5期に分けられます。天正18年（1590年）、内藤清成が家康より拝領した所に、寛永年代になって内藤宿と呼ばれる宿場が出来ました。青梅街道と甲州街道とが合わさった今の新宿通りと、南北に貫ける鎌倉街道との交差した場所に、元禄11年（1698年）内藤新宿が出来たのです。新宿2丁目にある太宗寺東側に当たる所が、新宿発祥の地です。その地に当時の浅草の名主、高松喜兵衛が中心となって、5千600両（今の相場で100億にも達する位の額）の権利金を納めて内藤新宿が成立したのであります。

その後、20年たった享保3年（1718年）に廃駅を命ぜられます。廃駅の理由としては、飯盛女（売春婦）の客引きが目についたとか、色々な事が挙げられています。廃駅期間は54年間にわたり街は寂れましたが、5代目高松喜六が請願して、明和9年（1772年）に宿場が再開したのです。以前を「前新宿」、再開以降を「後新宿」と呼び、「新宿の三奇人」といわれた、十返舎一九、平賀源内、蜀山人など、新宿を愛した著名人達を輩出したほどに賑わいをみせました。その後ターミナルと女郎の街として発展し

それは今日も変わりません。

花園神社は慶安元年（1648）尾張公が創建したもので、それ以前は街道筋（今の伊勢丹の所）にあったようです。しばしば火災に会い、その復興の為に三光院（真言宗の別当）芝居と称したものを催し、それは名高く明治初期まで続けられました。その伝統は今日の唐十郎や外波山文明等が小屋掛けしている事に表れています。

明治の時代になりますと、大名達は国元に戻り、商人達も共に帰っていったこともあって、江戸の人口が激減します。もちろん新宿も例外ではなく寂れました。

新宿駅が出来たのが明治18年です。その頃は人口も回復し、新宿の中心がだんだんと新宿2丁目から新宿駅の方に移って行きました。現在の中央線と山の手線が交差した場所は、やはり重要性が高いことから、地方の商家の資本が投下されるようになったからです。

昭和20年、敗戦と共に疎開先や外地からの引揚者が溢れる時代となります。進駐軍（アメリカ軍）によるモータリゼーションもあり、明治道路と靖国道路の交差した場所、すなわち花園神社の場所（より少しずれていますが）、歌舞伎町が新興の町となり、やがて風俗の町となっていきました。そこへ投資したのが台湾、朝鮮の在日の人達です。

やがて東京オリンピックに向かっての高度経済成長にともない、ビルラッシュが始まって町の様子も一大転換をきたします。西口の浄水場跡地に、昭和46年いきなり京王プラザが出来て、その後続々と大企業資本による超高層ビルが建ち始めて新宿は副都心となりました。更に現在は南口が再開発中で、今後メトロ13号線の開通と共に新宿はまた新しい時代に入ろうとしています。